

言語社会専攻（インドネシア語）講師

松村 智雄

2019年4月よりお世話になっております。松村智雄と申します。インドネシアをはじめとして東南アジアの華人社会について、中国華南地域や台湾、香港との連関も含めながら研究をしてまいりました。

インドネシアに触れたきっかけは、当時住んでいた大学の学生宿舎でした。そこは留学生が3割ほど暮らしている場所で、たまたまインドネシア出身の学生と知り合いになりました。インドネシア人といっても地域ごとに特徴がありますが、よく話していたのはスマトラ出身のバタック・カロの学生とジャワの華人の学生でした。学部3年次に、一つ上の先輩で、インドネシアの地方語を研究されていた人がインドネシアに留学していたので、彼がいたジャワ島中部にあるジョクジャカルタを訪れました。これが初めてのインドネシア体験でした。ジャワの人々の生活様式に触れ、海や山の自然の豊かさ、ボロブドゥール遺跡に圧倒され、大学生たちとの交流は大変楽しいものでした。

その旅行から帰ると、1年後には私もインドネシアに留学したいという気持ちがすでに募っていました。当時は、インドネシアは現在のような経済発展のイメージはなく、家族や友人からは「なぜインドネシアへ？」と首を傾げられたことを覚えています。

そして学部4年のときに念願かなってジョクジャカルタにあるインドネシア国立ガジャマダ大学に留学しました。卒業論文ではジャワのイスラム教徒の宗教実践を取り上げました。

博士論文は、カリマンタン（ボルネオ）島の西部でのフィールド調査を基に執筆し、これを改稿して拙著『インドネシア国家と西カリマンタン華人：「辺境」からのナショナルリズム形成』（慶應義塾大学出版会）を2017年2月に出版しました。

この書籍が取り上げる西カリマンタンは、インドネシアのナショナルな国家建設の中では比較的后進地域とされています。しかしそうだからこそ、そこに暮らす人々は自前のネットワークを保持し、ジャカルタや台湾、香港、サラワクなど多地域に生活の糧を得るために移動し、自助的な活動（国民国家に期待しない活動）を展開してきました。このような活動は、国民国家単位では理解できない性質のものであり、それとは違った地域理解が必要とされます。本書は、従来のインドネシアという枠組みを前提としたジャワ偏重傾向の中で、それを前提とすることなく、地域理解を試みた地域研究の成果と位置付けられると考えております。

教育に携わるなかで、主な研究分野を基盤にして、それをいかにより広い研究分野の中に位置付けられるかということ絶えず考えるようになりました。自身の専門分野を最大限に生かしつつ、その幅を広げていく試みを、先生方との関わり、学生と接する中で進めたいと思っております。ご指導・ご鞭撻のほど、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

## 言語社会専攻（フィリピン語）助教

矢元 貴美

2019年4月に言語文化研究科言語社会専攻の助教として着任いたしました。フィリピン語の授業や、言語・教育の卒論ゼミなどを担当するとともに、フィリピンにルーツを持つ子どもたちへの教育について実践・研究を行っております。

私が最初にフィリピンに興味を持ったのは中学生の時でした。地元の町の中学生国際交流推進事業で、夏休みにオーストラリアでのホームステイをした時のことです。自分と同じように黒髪で黒い目のホストファミリーに温かく迎えられ、一生懸命英語で会話しましたが、家族間の会話は必死で聞き取ろうとしても理解できないことが多く、自分の英語能力の低さに落胆していました。しかし、家族同士が話す時に使っているのは英語ではないことに間もなく気づき、それがタガログ語（フィリピン語）であるということを知りました。

そして、今でも交流が続いている、とても親切で楽しい中国系フィリピン人ホストファミリー一家や、体験入学した学校で出会った東南アジア諸国出身の友人たちの国について学んでみたい、ホストファミリーとタガログ語で話してみたいと思うようになったのです。その後、大阪外国語大学外国語学部、そして、言語社会研究科博士前期課程に進学し、フィリピン大学での留学も経験しました。学びたいことが学べ、先生方や友人にも恵まれ、充実した学生生活を送ることができました。

学部生の時に、阪神間の公立小・中学校でフィリピン出身の児童生徒を支援する仕事に関わるようになったことがきっかけで、現在まで彼らの教育についての実践・研究に携わっています。博士前期課程の途中からは、平日の昼間は兵庫県や大阪府の中等教育学校や高等学校で働きながら、退勤後や休日に調査研究に取り組むという生活を送りました。修士論文ではフィリピンの一小説を分析しましたが、教育支援に携わる中で生じた疑問を基に、フィリピン出身の子どもたちに関わる教育的課題を研究したいと思うようになりました。その後入学した大阪大学人間科学研究科博士後期課程では、仕事と研究の両立に苦労しながらも、生徒たちや調査に協力してくださった方々にも背中を押していただき、何とか博士論文を提出することができました。

このたび母校で教育研究に携われることとなり、大変嬉しく思っております。教育・研究ともに発展途上ではありますが、学生たちとの学びを大切にしながら、また、先生方や職員の方々からもご教示いただきながら、自己研鑽に努めたいと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 言語社会専攻（ヒンディー語）助教

拓 徹

あらためまして、2019年4月に着任いたしました拓徹と申します。専門はカシミール紛争の研究です。インド・パキスタン両国の間で独立以来争われているこの積年の紛争について研究するために、2000～2010年にインド側のジャンムー・カシミール州立ジャンムー大学に留学し（同地滞在は2012年まで）、現地でヒンディー語を使って日常生活を送っていたため、このたびご採用いただく榮譽に与りました。ヒンディー語専攻では、文学、言語学がご専門の教授陣を、政治・社会の側面からお手伝いさせていただくことになります。

自分がなぜカシミール紛争を研究するに至ったのかと申しますと、様々な関心・事情が重なった結果だったのでなかなか一口にご説明しにくいのですが、過去に掲載された自己紹介エッセイの例に倣い、私も少し時間をさかのぼって思い出してみようと思います。

私は中高時代、いわゆる「文学少年」でした。中学2年のときにサルトルの戯曲や短編、ランボーの詩などを翻訳で読み、自分が存在するとはどういうことなのか分からなくなり、以後は学校の勉強に身が入らず、地元名古屋の図書館・美術館・映画館などを徘徊する日々でした。そういったかたちで文化系一辺倒だった私を社会科学に引き込んだのは、高校の終わりごろに読んだレヴィ＝ストロース『悲しき熱帯』導入部の自伝エッセイでした。これを読んで、なるほど、人間について理解するには、個々の人間を作り上げる社会構造について知らなければいけないんだ、と単純に目が覚めた思いで、進学先を筑波大学の国際関係学類に決めました。

筑波大学に入学後、周囲の学生の間では、当時の日本政府のODA政策について盛んな議論があり、「途上国」現地の人々は本当にこうした政策を望んでいるのか疑問視する意見が幅を利かせていました。私も、言われてみればODAは貧困にあえぐ現地の人々の声に直接返答する政策ではない気がし始め、どうせなら聞こえてくる現地の声に直接向き合うような活動がしたいものだと考えるようになりました。また、諸事情から3年生を終了した時点で休学し、1年間アメリカに語学留学したのですが、これが中高時代から親しんできた欧米の美術や音楽を満喫する機会となり、あまりに楽しかったので「欧米はもういいや」となりました。これ以降、自分の関心はアジアへ向かうことになり、また上記の事情から、カシミール現地からたしかに聞こえてくる「現地の声」（紛争下の人権侵害などにあえぐ声）に向き合ってみたいと考えるようになり、もともと抱いていた南アジア～中央アジアやイスラームなどへの関心も重なって、カシミール紛争の研究を志すようになりました。

そんなこんなで、その後もいろいろありまして現在に至っております。やや中途半端な自己紹介となり恐縮ですが、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

言語社会専攻（ドイツ語）助教

北岡 志織

2019年10月に着任いたしました、北岡志織と申します。専門は現代ドイツ演劇・文学です。私は大阪外国語大学と大阪大学が統合して二年目の2009年に大阪大学外国語学部ドイツ語専攻に入学しました。進藤修一先生、中川裕之先生、この春退官された山元孝郎先生、退官後も非常勤で教えてくださっている高田珠樹先生には在学中にも大変お世話になりました。恩師の先生方と一緒に、後輩でもある学生の皆さんの教育に携われることは、大変光栄なことであり、また身の引き締まる思いでもあります。

在学中は市川明先生（統合後豊中の文学研究科へ移籍、2014年ご退官）の演劇ゼミと山元先生の文学ゼミに所属しました。当時市川先生のゼミは、楽しいうえに、「一年に二度すき焼きが食べられるゼミ」として有名で、演劇は高校の文化祭で触れた程度であった私は、楽しく、しかもすき焼きも食べられるということでゼミを志望したのですが、結果的にミメーシスの世界に魅せられ、卒業論文ではクライストの戯曲を取り上げ、市川・山元両先生から丁寧なご指導を受けることができました。

演劇研究の楽しさにずいぶん遅く目覚めた私は、もう少しだけ学びたいと豊中の文学研究科文化動態論専攻の修士課程に進学し、2014年秋から一年間ドイツのハンブルクに留学しました。引き続きクライストを研究するつもりだったのですが、初めて現地で観た演劇に衝撃を受け、修論のテーマを大きく変更することになりました。それは、公立劇場が、イエリネクの難民問題に関する戯曲『庇護に委ねられた者たち』を、収容所でスカウトした難民を舞台に上げて上演したもので、舞台上では「俳優によるイエリネク戯曲の再現」と「難民によるトラウマ的過去の語り」が同時に繰り広げられていました。

この作品は、私のこれまでの「演劇」に対する理解を打ち砕くものであり、当初はいかに理解すべきかさっぱりわからず、何度も劇場に通いつめました。この作品のテキスト・上演分析を通じて、ドイツ中心主義の公共劇場が、難民という新たな「他者」をいかに表象するのか、そしてその中で自らのいかなる問題点を見つけ、上演を通じてそれを乗り越えようとしているのかという問題意識を抱くようになり、これを研究のテーマに据えました。

それまで古典演劇に関心を寄せてはいましたが、必ずしも一貫したテーマや視点を持つてはいなかった私でしたが、このテーマには修士課程修了後も関心を抱き続け、一旦別の職に就いたものの、研究を諦めきれず、東京で博士課程に進学し、ドイツでの在外研究を交えながら研究を続けてまいりました。学部在学中に「すき焼き」につられ軽い気持ちで演劇ゼミの扉を叩いたことが、現在までドイツ演劇を学び、研究するきっかけとなり、人生とはわからないものだなあと思います。

この度、ご縁があり、慣れ親しんだ箕面キャンパスに移転前に戻ってくることができて、本当に嬉しく存じております。教歴もまだ始まったばかりの未熟者ではございますが、先輩の先生方や学生の皆さんから日々学びつつ、成長していければと思います。今後とも宜しく

ご指導・ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

言語社会専攻（イタリア語）助教

霜田 洋祐

2019年4月にイタリア語専攻に着任いたしました、霜田洋祐です。イタリア近代文学が専門と称していますが、これまでほとんど、ミラノ出身のマンゾーニというひとりの作家の、しかも『婚約者』という長篇小説一本しか研究しておらず、そのほかはとても専門と言えるレベルでないというのが本当のところでした。専門の講義や論文の指導をする立場になったことを良い機会に、これから研究の幅も広げていきたいと思っています。

出身は温泉で有名な大分県別府市です。小学校の終わりから高校卒業までは隣の大分市にいました。大学進学以降は留学中を除いて現在までずっと京都市に住んでいて、もはやここが一番長く過ごした町になっています。このほか、留学・研究のため1年半ほどミラノで暮らしました。九州でも冬は寒いですし、京都は底冷えで有名ですが、寒いのが苦手な身に最もこたえたのは「霧の街」ミラノの冬でした。ミラノは海と太陽の地中海世界ではなくヨーロッパなのでした。大阪大学に来る前は、日本学術振興会特別研究員として東京大学に所属しましたが、この間も京都を拠点としていました。

関西の暮らしが長いわりに、これまで大阪大学との縁は薄く、思い出と言っても妹が文学部に通っていて時折訪れていた阪急石橋駅周辺が懐かしいくらい、と書こうとしましたが、違います、もう一つ壮絶な思い出がありました。これも豊中キャンパスの話ですが、大学院生のころ、初めて学会で発表をした記念すべき大会の会場が大阪大学だったのです。発表前日、司会の先生に誘われ、打ち合わせと称して一緒に食事をしたのですが、度を越して飲んでしまったのがいけなかった。二日酔いどころではない最悪のコンディションのまま朝を迎え、開会時刻は諦め、どうにか自分の発表に間に合う電車に乗って、這うようにして会場に辿りつき、脂汗なのか大粒の汗を滴らせながら原稿を読み、質疑応答で何を答えたかも覚えていない、あのときの会場はどこだったか。週に一度はその側を通ることになったのは何やら感慨深いですし、よく考えれば、あのとき「もう諦めて次の駅で降りよう」と何度考えたかしのれない阪急に乗って元気に通勤するようになったのも面白いことです。

今年度は新型コロナウイルスの影響でかなりイレギュラーな形で学期が始まりましたが（ついでに言えばミラノを含むイタリア北部の悲惨な状況には言葉を失ってしまいますが）、日常が戻ってきたときに、大阪大学への通勤が行きも帰りも決して苦しいものにはならないよう、研究、教育そして学内業務といった大学での活動を充実させてまいりたいと思います。すでに多くの皆さまに様々な形でお世話になっておりますが、引き続きご指導ご鞭撻いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

言語社会専攻（ポルトガル語）助教  
サルダーニャ カリーナ（金沢 花梨奈）

2019年4月より、言語文化研究科・言語社会専攻(ポルトガル国語)に着任いたしました、サルダーニャ カリーナです。ヨーロッパのポルトガル語とポルトガルの文化に関する授業を担当しています。大阪大学で教壇に立つことができ、非常に嬉しく思っております。専門はポルトガル語とフランス語言語教育で、口承文学とポルトガルモダニズム文学に関心を持っています。

出身はリスボンから北へ 300 km、ポルトガル第二の都市ポルトです。人口約 23 万人の商工業都市として栄えてきましたが、近年は観光客が年々増加し、観光都市として賑わっています。生まれと育ちはポルトですが、父がポルトガル人、母が日本人であるため、二つの言語と文化の環境の中で育ちました。又、子供の頃、夏休みに日本へ訪れることが何度かありました。このように、日本には馴染みがありましたが、外国で生活するという経験はこれがはじめてでした。2017年に京都外国語大学ポルトガル語学課に招いて頂いたのがきっかけです。一年後、2018年には阪大で非常勤講師として仕事を始めました。三年間はあっという間に過ぎてしまいましたが、毎日多くの人との出会いとチャレンジがありました。振り返ると今が一番充実した時間のように感じます。

学生時代、フランス語の美しさに魅了され、ポルト大学でフランス語とポルトガル語を専攻しました。2014年にポルト大学文学部でポルトガル語とフランス語教育修士課程を修了しました。

西洋と東洋、大きな隔たりのある二つの文化と言語の間で育った事も起因し、グローバル化された現代社会において、外国文化と接触する機会が日増しに多くなり、相互の理解には言語と文化を離して考える事は不可能だと考え、修士課程の研究としては「ポルトガル語と外国語教育における異文化間対話へのストラテジー」と言うテーマをフィールド・ワークに取り組み、施行しました。ポルトガルと日本、および日本とフランスの伝説、神話やことわざ等を取り上げ、異文化間対話を、ポルトガル人学生を対象に実践し、その調査結果を論文にまとめました。

日本では、京都外国語大学での CALL 授業で使用する教材を元に、ブラジルとポルトガルのジェスチャーと慣用表現を研究しはじめました。現在は本研究をアンゴラやモザンビーク、ポルトガル語を公用語とする旧植民地諸国の研究をしています。

今まで先生方、職員の皆さま、学生さん達、本当に多くの方に支えて頂きました。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

言語社会専攻（インドネシア語）特任准教授

Dwi Puspitorini

Hello everybody. My name is Dwi Puspitorini. I am the Indonesian language instructor at the Graduate School of Language and Culture. Previously, I taught Indonesian as a foreign language at the University of Indonesia. There, I also taught Javanese and Old Javanese. I arrived in Osaka at the end of March, 2019. I am honored to have the opportunity to teach at Osaka University. I hope we can get to know each other and learn about each other's country and culture. Thank you.